

太宰府中学校2学年だより

No.8

R1.5.29

文責：石橋 眞子

少しずつの「不満足」



体育祭が終わり、どの学級も心機一転で班替えを行いました。新しい班の満足度は何%ですか。

私はいつも、班替えのときに、生徒に伝える話があります。みなさんにもぜひ伝えたいと思って掲載しました。今の皆さんなら、きっと分かってもらえると思います。



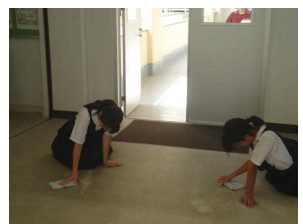
実は私はあまり班替えは好きではありません。なぜかと言うと、これまで班替えでいい思い出がないからです。

必ず「前の班の方がよかった」とか、「つまらない」と言って不満を口に出す人がでてくるからです。

皆さんのこれまでの班替えはどうでしたか？

だいたい、学級に40人近くもいて、みんなが満足の班替えなんて不可能なんじゃないかと思います。一部の人たちにとって、大満足の班替えができたとします。でも、反面、それと同じくらいの人たちが、不満足の気持ちをもっていると思ってください。

学級集団の中では、残念ながらそれが当然のことなのですが…それでもみなさんは班替えを楽しみにします。



でも、みんながみんな班替えをしたいということではないということも頭に置いておかなければなりません。繰り返しますが全員の方が満足する班替えは不可能のような気がします。ではどうすればいいのか？

大切なことは、一部の人が満足をする班替えじゃなく、みんなが少しずつ不満足を持つ班替えにしていくことではないかと思います。

そんなとき、受け持ちの先生がよく言われていました。

「みんな少しずつ不満足を持った方がみんな幸せになれるんですよ」って。いったいどういうことかわかりますか？

(写真は、マナー講習会・掃除の時間に皆さんが頑張っていた「すてきな」姿です)



先日、ある聾学校のことが紹介されていました。その学校の教室に入ると、教室中に赤い線が張られているそうです。少しでも補聴器の聞こえがよくなるようにするためのアンテナだということでした。廊下や教室のあちらこちらには、電池の量をチェックするチェッカーが置いてあります。



この学校の生徒たちにとって、補聴器は音のある世界と自分を結ぶ唯一の手段なのです。だから、電池がなくなるということは命の危険をも伴います。授業は、一般の中学生と同様の教科以外に、相手の口の形を見て、何を言っているのかわかるようになるための授業もあります。聾学校というと、手話を思い浮かべますが、この学校では、口の形で言葉を読み取る訓練をしているようです。

この学校はわずかな子ども達が、よりそって学んでいる学校です。助けあい、協力しながら・・・。

朝と夕は、みんなバスで登下校します。毎日バスの中で、聾学校の生徒達は悪戦苦闘しています。行き先を聞いても、相手に伝わらなかったり、無視されてしまう日常。歩道があるいても、自転車にひかれそうになり、怒鳴られる日常。そのようなことが日常として繰り返されているのです。

でも、それにもかかわらず、生徒達は、元気に登校してくるんだそうです。冷たい社会から、このあたたかい学校という社会に希望をもって登校してくるんです。

この学校の生徒は一人ひとり、不自由さを持っています。でもその不自由さがあるからこそ協力が生まれ、助け合えるのではないかと思います。

何の不自由も無いのが当然という中学生と、不自由があるのが当然という中学生。

不自由さを嫌がるわたし達は、何か大切なことを失っているのかもしれない。

「みんな少しずつ不満足を持った方が、みんな幸せになれるんですよ。」この言葉の裏にはそんな温かい思いがかけていたのです。

さて、話を戻しましょう。班を替わった後の皆さんの顔はどうなっているのでしょうか？自分の思い通りになって大満足？それとも、思いがかなわず不満足？・・・考えてみると、前述した「みんな少しずつ不満足を持った席」と言うのも非常に難しいことなのかもしれません。

今の皆さんの様子は、班の仕事や、掃除の活動に頑張る人がずいぶん増えましたが、時折「この程度でいいか」といういい加減さを注意せず、楽な方に流れる様子が見うけられます。しかし、この班替えから来る「不満足」さは、成長しつつある2年生を大きく変えるチャンスになると確信します。

今回の班替えの結果に、あなたが多少なりとも不満足があれば、その裏に隠されている「温かい思い＝不自由さがあるからこそ生まれる協力や助け合い」をぜひ新しい班で掘り起こして欲しいと願っています。